

## [COMMUNION]

WEB: [http://www.nskk.org/](http://www.nskk.org/tokyo/index.html)

tokyo/index.html

E-mail: [comm.tko@nsk.org](mailto:comm.tko@nsk.org)

PHONE: 03-3433-0987

FAX: 03-3433-8678

Diocese Office



## 《イースターメッセージ》

## イエスの死が記念される意味

司祭 ヨハネ 八木 正言



「死亡人口」という言葉を  
をご存知でしょうか。世界  
中で一年間に死亡していく  
人の数（人口）を指す言葉  
で、世界人口約77億人に対  
して、約7000万人がこ  
れに当たるようです。一年  
間に、日本の人口の半分を  
はるかに越える人が死亡し  
ている勘定になります。ま  
た先の大戦の死者数は約  
5000万人と言われている  
ので、毎年世界中でその  
同数をはるかに越える死亡  
者がいることになりました。

したがって、有史以来、  
どれくらいの方がこの地球  
で死を迎えたのかという  
（死亡人口×年数）、おびた  
だしい数の死者がいたこと  
になります。

その中には、2000  
年前のイエスと同じよう  
に、裏切られ、拷問に遇  
い、不正の刑を受けて死  
んだ人も数限りなく存在  
しているでしょう。しか  
し、そんな不遇の死を遂

げた数多い死者の中で、  
どうしてイエスの死だけ  
が、2000年以上にわ  
たって記憶され、記念さ  
れてきたのでしょうか。

わたしたちは誰もが例外  
なく死を迎えます。大金持  
ちであれ、社会的な地位を  
上り詰めた人であれ、世界  
の英雄と称えられた人であ  
れ、必ず死を迎えます。に  
もかかわらず、誰もが必死  
に生きようとしていること  
も事実です。怪我をしたり、  
病気になれば、何とかして  
助かるうとします。災害に  
遭えば、必死に復興しよう  
とします。どうせ死ぬ存在  
なのだから、そんなに藻掻  
いても慌てても仕方がな  
い、時の流れに身を任せよ  
う、などととは思いません。  
なぜでしょうか？ 最終  
的には自分の存在が無に帰  
してしまおうとしたものであ  
るのに、それでも生きたい  
と思うのは。

それは「生きる」という

ことに、最終的には無に帰  
する「死を迎えることがわ  
かっていても、その事実を  
越える意味が存在するか  
らではないでしょうか。そ  
して、この死をも越える生  
きるこの意味をわたしは  
「愛」と呼ぶのだと思うの  
です。

アーチボルド・マクリー  
シュという詩人が、ヨブ  
記を題材にした作品の中  
で、登場人物に語らせる短  
い台詞があります。「教会  
のロウソクは消え、夜空の  
星も瞬かない。だから心の  
灯をともしましょう。そう  
すれば、やがて見えてく  
る」。マクリーシュは、す  
べての輝き失われた現実に  
あっても、唯一消えないも  
のがあることを、いや、形  
あるものがすべて消え失せ  
てしまおうときにこそ、確か  
に心に灯るものがあること  
を言いたかったのではない  
でしょうか。そしてイエス  
の死が記憶され、記念され  
てきたのは、そこにこの真  
実があったからだと思うの  
です。

わたしたち以上に苦しま

れ、辛辣をなめさせられ、  
ボロボロになって、「でき  
ることならこの苦しみを取  
りのけて欲しい」と神に向  
かって叫ぶまでに人生の敗  
北を十字架上で体験された  
イエス。しかし、わたした  
ちなら容易に意気消沈し、  
諦めてしまおうであらうそ  
んな現実の直中でも、消せな  
い真実があることを示され  
たイエス。それはイエスの  
神と人への愛でした。だか  
らイエスの死は2000年  
以上にわたって記憶され、  
記念されてきたのです。

わたしたちは今、本当に  
愛するということを「知っ  
て」いるでしょうか。自分  
に利益をもたらしてくる  
とか、自分が心地いいとか、  
楽しいからとか、そんな根  
拠だけを土台にして愛する  
ということを語ってはいな  
いでしょうか。

今年のイースター、あら  
ためて愛するということを  
黙想したいと思えます。根  
拠や土台がすべて消えた  
きにこそ灯すことのできる  
心の灯があるのだというこ  
とを。

## なぜ聖公会はSDGsに取り組むのか？

管区女性の課題に関する担当者

司祭 大岡 左代子

日本聖公会が国連女性の地位委員会（以下、UNCSSW）の聖公会代表団に初めて代表を派遣したのは2005年のことでした。その何年か前からACC（聖公会中央協議会）ではUNCSSWにNGOとして代表団を派遣していましたが、この年は「北京10」という一つの節目の年でした。その最初の派遣者として日本聖公会から参加したのは、山野繁子司祭と私でした。

「北京10」というのは、1995年に北京で開催された「第4回世界女性会議」から10年、その時に採択された『北京行動綱領』から10年を意味しています。この会議は、1975年から5年ごとに開かれた国連主催の世界女性会議でした。世界190の国と地域から政府間会議およびNGOフォーラムあわせて約5万人が参加し、20世紀最大規模の会議となったと言われています。そしてこの会議で生み出されたのが女性の人權に関する包括的で高い水準の文書と評価されている『北京行動綱領』です。この文書には、

「女性」をとりまく課題が12の重大領域（貧

困、教育、健康、暴力、武力紛争、経済、意思決定機関への参画、地位向上のための制度、人権、メディア、環境、女兒）にまとめられ、政府、自治体、市民が取り組む行動指針が明記されました。その後、5年ごとに国連に

女性たちが集まり、その成果と課題について議論が重ねられていたのでした。そして、国連にNGOとして参加しているACCもこの会議に女性たちが参加することを後押しし、現在に至っています。

実は2005年当時世界的にはすでにジェンダー平等・女性解放運動

への反対が始まっており、国連の会議自体は『北京行動綱領』に基づいた具体的な行動指針は出さないう、ということが終わった記憶があります。一方で、2000年の国連ミレニアム・サミットで承認



された「ミレニアム宣言」に基づいた具体的な行動指針である『ミレニアム開発目標（MDGs）』が大変話題になっていました。それは、極度の貧困を削減し、安全でより繁栄した平和な世界を創り出すための世界規模のパートナーシップに対するコミットメントを8つの目標をおいで示すものでした。

『北京』との違いは「女性」だけにフォーカスしていないこと、開発途上国の課題に重点が置かれていることで、2015年という期限が示されていました。そして、ここで取り上げる『SDGs（持続可能な開発目標）』は、

2015年、北京から20年後に国連総会で採択されたもので、『MDGs』の後継としての側面を持ちつつ「地球規模の課題に対してこれまでの国連が開催した様々な会議や条約の集大成として見ることもできる」

と（社）SDGs 市民社会ネットワークが述べています。世界中で経済的格差増大、平和、環境破壊の問題が深刻になってきたことが背景にあるからです。2016年以降のUNCSSWではこの『SDGs』が取り組むべき課題として提唱され、聖公会代表団でも共有されてきました。

『SDGs』の前文には『我々は、人類を貧困の恐怖および欠乏の専制から解放し、地球を癒し安全にすることを決意している。我々は、世界を持続的かつ強くしなやかな道筋に移行させるために緊急に必要な、大胆かつ変革的な手段をとることに決意している。我々はこの共同の旅程に乗り出すにあたり、誰一人取り残されないことを誓う』と書かれています。キーワードは、地球・繁栄・平和・パートナーシップです。「誰一人取り残さない」というフレーズはイエスの説かれた福音に重なるものがあると思うのです。私たちは、巨大な組織である国連の宣言に追従するという視点ではなく、これを私たちの教会の課題として、捉え具体的に取り組んでいければと思います。

SDGsとわたし

管区事務所 総務主事

金子 登美江

2019年3月11日〜22日にかけて、日本聖公会より推薦を受けて、全聖公会8名の代表団の一人として、国連女性の地位委員会

(The Commission on the Status of Women 以下UNCSSW)に市民参加者として派遣されました。国連に連なる196の国と地域の各代表団による合意結論作成会議に並行し、ニューヨークの国連ビル内外において、各国やNGOによる約700ものイベントが用意されており、各団体による女性や女性のジェンダー平等やエンパワメントに関する報告、問題提起、討論、が行われました。肌の色も年代も言葉も多種多様な約7000人の人々が会場を行き交い、語り、耳を傾け、怒り、嘆き、力を分け



2. 飢餓をゼロに  
いくつかの教会で実践されている日曜給食、子ども食堂、フードパントリー活動など。一教会での活動は難しくても、教会、教会グループを越えて一人一人が一歩を踏み出せば、大きく広がりのあるテーマとなるでしょう。

合い、時には歌い、踊り、エネルギーで濃厚な学びの時を過ごしました。大多数の地域、組織において、女性の地位は平等とは言い難い状況です。日本も驚くほど遅れています。

そのUNCSSWの中で、SDGsの5番目の目標はジェンダー平等であるということに頻りに耳にしました。SDGsとは何であろうかと検索し、2015年の国連サミットで採択された持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals) であると分かりました。持続可能な……開発目標？ さらに調べてみると、17の目標と169のターゲットで構成された「地球上の誰一人として取り残さない」を理念とした世界の変容を求める活動であり、全世界の国や企業は勿論のこと、個人の参画も促されているとわかりました。

SDGsに関心を寄せてからというものの、今まで見過ごしていたSDGsが私の日常生活の中に存在感を持ち始めました。クリスチャンの視点では、まず、祈り書の代祷に「互いに尊敬する心を与え、ともにすべての人の幸いを求めさせてください」とあるのに気が付きまし

4. 質の高い教育をみんなに  
国内外への献金（学習支援活動、毎週の奉獻、感謝箱献金、世界祈禱日、リストコインなど）を通して、アジア、アフリカの女性、子どもの教育、自立を支援すること。



た。ともにすべての人の幸いとは、SDGsの「誰一人として取り残さない」と通じるものがあります。また、2019年8月、聖公会関係学校協議会での西原廉太司祭（当時）による基調講演で、宣教の5指標の、③「愛の奉仕によって人々の必要に応答すること」、④「社会の不正な構造を改革し、あらゆる暴力に反対し、平和と和解を追求すること」、⑤「被造物の本来の姿を守り、地球の生命を維持・再生するために努力すること」はSDGsだとの提起があり、まさしくそうだと、思考が繋がりました。宣教の5指標は1984年の全聖公会中央協議会（ACC6）において採択された指標です。SDGsが採択された2015年よりもずっと前から、全世界の聖公会でSDGsの取り組みがなされているのです。そして、聖書に目を向けると、迷える子羊一匹さえも軽んじ

ずに探しに行く物語がありますし、イエス様がなさったことといえば誰一人取り残さないそのものであることに気付かされます。教会での様々な活動、小さくされた者に寄り添う姿、神様への日々の感謝はSDGsそのものなのです。

興味のある方は様々ですが、17の目標は多岐に渡っていますから、きつと関心を覚える項目がある筈です。私がそうであったように、少し目を開き、耳を傾けるだけで意識が大きく変わるでしょう。個々の力は小さくても、集合体となった時、大きな力と成り得ます。神様が創造なさったこの世界を健全で幸せな形で持続するために、わたくしとして、キリスト者として、社会の一員として、地球人として、一緒に世界の変容を求めて行きましよう。

（北関東教区 浦和諸聖徒教会 信徒）



5. ジェンダー平等を実現しよう  
イエス・キリストは「神の前に男も女も平等」と教えられました。教会はこの教えに忠実ですか。教会の大切な事柄を決める会のメンバーが男性に偏っていませんか。台所で働くのは女性だけでは？性別で役割を分けるのは差別ではありませんか。

## 神学院の学びを終えて

大切にしたいこと

聖職候補生 藤田 誠

この3月に聖公会神学院を卒業しました藤田誠です。三光教会出身です。神学院生活3年の間、私と妻を祈りとさまざまな形で支えて下さいました三光教会のみなさま、モニカ会のみなさま、季節の変わり目で東京教区の神学生たちの話を聴いて下さった聖職養成委員会のみなさま、その他、ご支援下さいました東京教区のみなさまに感謝致します。また、推薦司祭である神崎和子司祭、神学院へ送って下さった大畑喜道主教、見守って下さった広田勝一主教、教会実習の指導司祭であった卓志雄司祭、中村淳司祭、中川英樹司祭、論文指導の佐々木道人司祭、中村邦介司祭、そして、折々に触れてお祈り下さいました高橋宏幸主教にこの場をお借りして御礼申し上げます。

私は30代の頃、仕事や人間関係で苦勞していたときに教会で洗礼を受けました。教会には私の苦勞を共有して下さった先生や兄弟姉妹のみなさんがいらつしやいました。そして、その苦勞の共有にはいつも十字架のイエスさまがいらつしやいました。

私が聖職志願をした根底には社会で生きにくさを感じている人に教会

にはその苦勞を共有してくれる方がいること、その交わりの中心にイエス・キリストがいらつしやることをお伝えしたいという思いがありました。

神学院生活3年間における教会実習(練馬聖ガブリエル教会・東京聖マルチン教会・池袋聖公会・浅草聖ヨハネ教会・東京聖マリア教会)、夏期実習(新生会、大阪サワリ、北海道べてるの家)、各授業(聖書・教会史・教理・礼拝・牧会・説教)すべてに

おいて「苦勞の共有」は一つの軸となり、励ましを受け合う共同体になるためには何が求められるのか?という学びを深めて参りました。

このことは、「教会が安心して苦勞を共有できる場となるために何が求められるのか?」という課題とも繋がってゆきました。苦勞というとてもセンシティブな体験を他者と共有するには勇氣が必要です。そのことをオープンにすることによって排除されるのではないかという恐れは常



にあります。

いまもって有効な方法を私自身、実践できてはいないのですが、3年間の学びを通して私が思うところは以下の通りです。

キリスト者それぞれがまず「弱さや脆さ」を表すことです。特に教役者がそのことを表すことはとても大切なことだと思います。弱さに逃げ、責任を免れるという危うさが伴うかもしれません。しかし、「弱さや脆さ」をオープンにしてイエス・キリストに委ねるといことは、人間中心ではなく神を中心にした共同体ならではの営みではないでしょうか。サーバント・リーダーシップの概念にも通じるように思います。が、強いリーダーシップではなく、イエス・キリストを中心にしたそれぞれの兄弟姉妹の営みを応援しあう共同体です。ある意味、牧師を含めて中心になる人はいないということかもしれません。

4月より目白聖公会で勤務となります。目白聖公会のご奉仕を通して、目白聖公会が大切にされてきたことを学び、目白聖公会の兄弟姉妹のみなさまとどのような「苦勞の共有」が可能なのか?祈り歩んでゆきたいと思えます。(写真左)

神学院を卒業して

聖職候補生 藤田美土里

卒業を前に、学びたいと希望した出発点に思いを巡らせていました。ずいぶん前になりますが、体調を崩していた中でいくつもの困難が重なる経験をした時のことです。それまでの自分が碎かれ、何をどう考えれば良いのか分からなくなったことがありました。しかし、聖書を通して私は神に慰められ、励まされました。この時の痛みの経験は何年もかけて、やがて恵みの「出来事」に変えられていきました。新たにされていった私は少しずつ出来事を受け容れ、心を挙げられるようになっていきました。痛みは感謝に、喜びが泉のように内側から溢れ出る経験へと導かれ、体調への理解と心の回復を果たすことが出来ました。それは自分の足で立ち上がって歩きなさいとの励ましを受ける、回心のような「出来事」だと思っています。

クリスマスチャンは信仰の歩みにおいて、それぞれが神との特別な経験を持っていることでしょう。福音は、人生において真に生きる力を与えてくれることを私たちは知っています。しかし、自らの経験を聖書と関連づけて言葉にした途端、なんとも怪しく疑わしく感じるものです。人間は欠けや偏りを持っていますから、み

言葉を用いることには危険が伴い、解釈を歪めてしまう危険性は、常に、誰にでもつきまとうものでしょう。正義は神のみにあると分かっているが、知らぬ間に神の正義を我が物にした途端に、周囲に違和感を感じさせるのかもしれない。み言葉の偏った解釈は他人を審き、分断・排除する力になり、その人自身をも滅ぼします。歴史は、偏った「正義」が人の命を奪い、戦争をもたらす事を語っています。このような聖書の危うさを繰り返す事を強く怖れていたことが聖書を学びたいと願った一番の理由でした。

神学院で過ごした3年間は、このような私の思いや想像を超えていました。聖書の学びは簡単に身につくものではありません。神学に一生を捧げた多くの人々が示す道の奥深さと掘がりに驚くばかりでした。神学院での日々の学びを通して、また、毎日の朝夕の礼拝によって一日が整えられ、課題と格闘し、読書と授業の準備に追われる生活でしたが、この期間に必要なことを身につけるといふより、一生求め続ける姿勢の大切さを教えて頂いたように思います。厳しさばかりではなく、日々発見と驚きがあり、喜びの経験でもありました。正しさを手に入れたかった私が学んだのは、聖書という言葉はその解

釈を超え、繰り返し今この時にどのような神の声を聴くのかを求める姿勢でした。

神学院での3年間をみ護りのうちに過ごし、教会へと新たにの歩み出して頂きました。これからの歩みの中でまた新たな課題と出会っていくと思いますが、行き詰まった時、神学院で過ごした3年間を振り返ることでしょう。

これまでの導きを神に感謝いたします。3年間共に支えて下さった先生方、スタッフの皆様、お祈り下さったみなさまに感謝を申し上げます。これらの祈りは、神への信仰からの祈りであることを胸に刻み、御手に委ねて歩んでいきたいと願っています。あらためまして、どうぞよろしくお願い致します。(写真右)

#### 神学院を修了して

聖職候補生 中村真希

1年という短い期間でしたが、無事に神学院での学びを修了致しました。あつという間のようで、何年分ものエッセンスを凝縮したような、密度の濃い1年間でした。

礼拝を共にささげる共同生活、改めて聖公会の神学を神学生として勉強する意味、目白聖公会・立教学院という異なるミニストリーの現場に触れたこと、夏期実習での体験……

ひとつひとつが大切な気づきと学びの機会でした。ことに、これまで主に頭で学んできたことを体で学び直し、牧会的・宣教的視点と常に照らし合わせながら共に「神学」できたことは、私にとって大きな意味を持つ時間でした。私たちが礼拝で大切にしていることは何なのか、御言葉を誰にどのように伝えていくのか、教会のミッションとは何なのか、現代社会においてどんな方が必要とされているのか。実存的な問いも含め、そういった課題に真正面から向き合い、これまで学んできた知見を駆使しながら取り組むことは、自分自身の信仰や召し出しが問われ、向き合う時間でもありました。

修了にあたって振り返ってみれば、この1年間は私にとって出会いと再会の1年だったなと思います。特に8年間日本を離れていた私にとって、東京教区の一員として再スタートを切るための、ある種途切れていた関係を回復していくための多くの機会が与えられました。外濠グループと環状グループ、2つの教会に実習に行くことで様々な教会の方たちと一気に出会うことができまし、その中にはもちろん以前からお付き合いがあった、懐かしく再会する方々もたくさんいました。他にも色々な場所で新たに出会った方々、再会し

た方々と顔を合わせる中で、これまでとこれからの関係性の土台を確認し、整えられたことを嬉しく思います。「今」の東京教区に触れ、送り出されるための大事な準備の時間でもあったと思います。

そして、生まれ育った聖公会神学院に学生として戻ってくるという稀有な体験の中、幼少期、あるいは青年期にお世話になった諸先輩方と再会し、神学生として指導を受けたり対話を深める中で、これまで与えられてきた関係性を基盤としつつも、新たに出会い直し、新しい関係性を築いていくことの意味も感じました。これから何年度でも新しく出会う方たちが待っているのだと、私自身も出会い直していくんだ、と出会いの道の心構えをさせていただいたように思います。

これから現場に派遣されていきますが、どんなときにも福音の喜びを伝え、分かち合っていくという召しの原点を大切に、次から次へとやってくる、新しい出会いと交わりの中で、自分らしく用いられていきたいと願っています。世の光として皆さんと共にそのミッションを担っていければ幸いです。ようやく本格的に皆さんの旅路に加わることができていることに感謝して、新人乗組員をどうぞよろしくお願いいたします。

(写真中央)

## 放蕩信徒シリーズ(2)

葛飾茨十字教会 平松 恵子

熱心なクリスチャンであった両親によって、生まれて4か月で幼児洗礼を受けた私は、自分の意志とは関係なく教会とのつながりができていたのだと思う。「天にまします我が父よ、」で始まる主の祈りや「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。」で始まる使徒信経などを、暗記させられたものだ。小学校も上級生になると、使徒信経などにある日本語が空で暗記してただ唱えていただけではなく、分かるようになる(もちろん内容ではなく文字の意味としてです)。「創造主である主を信じる」と言い、「その独り子であるイエス・キリストを信じる」と言う。「聖霊によって乙女マリアから生まれ、人となり、苦しみを受け十字架につかれ、死んで葬られ、三日目によみがえり、天に昇った」とあり、「主なる聖霊を信じる」と告白しているのだ。

私は、自分の心に問うてみた。私は、本当にこの祈りを唱えていいのかと。本当に信じているのか?と。

神様なんて見たこともないものをどうやって信じればい

いのだろう。宗教なんて人間が創り出したものじゃないか。そんな疑問を持ったまま、中学に入って父親を亡くしてからは母も私も弟も教会を離れた。兄だけがそこに自分の居場所を見つけ繋がっていた。

大学を卒業し、結婚して、子どもを育て終わり、50代後半から自分はこれから自分のために一生を大事に使おう、そう決心した私はやり残したことに着手した。それは三つ子の魂じゃないけれど自分のバックボーンにあるキリスト教と真摯に向き合うこと、もう一つは大好きな歌を本格的に修得することだった。

まずその時、頭に浮かんだのは私よりずっと以前から音楽も、牧師もやっていた兄に相談することだった。しかしこの時期兄は体調を崩し、休職していた。その間兄も自分はずいぶん悩んでいた。悩んでいた時期と重なっていた。私は兄に復職して欲しかったし、自分のこれからの「道しるべ」になつて欲しいと思っていたので、復職したら堅信を受けると約束をした。主に立ち返る決心であった。それから私の勉強が始まった。

兄の所へ行くたびにキリスト教関係の本を借りてきては読み漁った。しかし聖書を読むとやはり謎は深まるばかりだった。

まだ信仰告白はできないなあ、と思いつつも復帰した兄との約束を果たし、堅信式を迎えた。

まだまだ分からないことだらけの教会生活が始まったが、聖歌を覚え歌うことが楽しく不安はなかった。自分の居場所を葛飾茨十字教会に移してからは、様々な聖書研究会、教区の研修などへの参加、教会員の皆さんの導きなどによってだいぶクリスチャンらしくなってきたかなあと思う。これからは勉強も続ける一方、奉仕に力を入れようと自分の居をサンピエールという教会の敷地内にあるケアハウスに移した。教会といつも共にありたい、それは神を信ずることであり、私に頂いた神の賜物を生かすことであり、人々の平和を願うことであり、これからの晩年の人生を捧げるものであると考えている。そしてこれがイエスに従うこと、自分の十字架を背負うことなのだ。現在理解している。

## 【祭りの一冊】

「母の形見は借金地獄」

歌川たいじ著

聖職候補生 高柳 章江

著者は、自身がゲイであることを公表しているオープンリー・ゲイの方です。みんなから「歌ちゃん」と呼ばれています。歌ちゃんは40歳からマンガや小説を書き始めました。この本は、彼にとつて「自史上最悪の出来事」が描かれたコミックエッセイです。

幼い頃、母親から虐待されていた歌ちゃんが、大人になつて母親との関係を修復しつつあるさなか、母親はバブル崩壊の影響で多額の借金を抱えたまま、海で亡くなつてしまいました。

母親は生命保険に入つており、保険金があれば母親の借金は返済できるのですが、歌ちゃんは母の死因をめぐって保険会社と争わなければならなくなりました。

歌ちゃんは債権者の対応に追われながらも、弁護士と一緒に保険会社と戦う準備をします。その準備は過酷で、債権者や検死担当医から厳しい言葉を浴びせられて彼の心はしだいにしんどくなりまし



た。「いじめにあつていた中学生のとき何度も死んじやおうかと思つたけれど、こんなことになるなら、あるとき死んじやつていればよかった」。けれども、心が折れた歌ちゃんには、「うちにご飯を食べにおいで」と声をかけてくれる人がおり、戦うヒントをくれたり、背中を押してくれる人がいました。そんなふうに優しくしてくれる人を、彼は「心をわけてくれる人」と呼んでいます。

この本には「心をわける」という言葉がたくさん出てきます。その言葉は聖書にある「スプラंकニゾマイ」を思いおこさせます。新共同訳は「憐れに思う」と訳していますが、歌ちゃんの「心をわける」という言葉も、スプラंकニゾマイにつながる言葉のように感じました。歌ちゃんが人生最悪の時を振り返つて「今までよりも人間を好きになつた」といえるのも、人から心を分けてもらい、自分も人に心を分ける、そんな小さな営みが根底にあったからではないかと、私には思えてならないのです。

「難病とたたかう子どもと家族のための滞在施設」

私共「ぶどうのいえ」

え」は、2020年11月に「創立25周年」を迎えます。お蔭様で、創立以来の25年間に、「ぶどうのいえ」をご利用いただいた方は、

## ようこそ「ぶどうのいえ」へ

さまざまな働き [5]

累計7万7500人余のほり、年平均では3100人ほどになります。この間、東京教区をはじめ全国の教会や信徒の皆様から物心両面の温かなご支援をいただき、ただただ深く感謝しています。引き続き、「難病とたたかう子どもと家族のための滞在施設」を運営する「ぶどうのいえ」へのご支援、ご協力をお願いいたします。また、姉妹施設である、大阪教区の守口聖オーガスティン教会「守口ぶどうのいえ」と京都教区の京都聖ヨハネ教会「京都ぶどうのいえ」の働

きも覚えていただき、ご支援いただけるようお願いいたします。

創立以来四半世紀が経過するということですが、日々の事業活動に専念しており、今のところ特に記念行事等は計画していません。

それどころか、直近の「新型コロナウイルス」の感染予防のために、「ぶどうのいえ」を3月一杯「臨時休業」せざるを得なくなりまして（執筆時点）。本来ならば、3月末から4月初旬にかけては学校が春休みとなるため、地方在住の方々はその期間中に東京の専門病院での検診や入院しての診療・治療を予定されるケースが多く、患児が家族に連れられて上京し、そ



るを得なくなりまして（執筆時点）。本来ならば、3月末から4月初旬にかけては学校が春休みとなるため、地方在住の方々はその期間中に東京の専門病院での検診や入院しての診療・治療を予定されるケースが多く、患児が家族に連れられて上京し、そ

の家族も「ぶどうのいえ」のような滞在施設に滞在するために、滞在者や予約で混み合うシーズンとなるはずでした。それが、今年に限っては、東京での感染拡大の状況から上京を危ぶまれたり、受け入れ先の病院から診療日程の変更が告げられて、3月中の予約をキャンセルせざるを得ないケースも生じています。このために、「ぶどうのいえ」もがら空きとなり、正に創業以来の出来事となりました。

「ぶどうのいえ」のよう

な多人数の方々が滞在する施設では、日頃から「感染予防」に注意を払ってききましたが、今やパンデミック（世界的な感染流行）だと表現される今回の事態には全く対処不能で、この事業の難しさと同時に、日頃からの予防対策強化の必要性を強く実感しました。私共としても、1日も早い事態の収束と医療環境の回復を願っており、ま



た以前のように滞在施設を求める社会的なニーズに応えていきたいと思っております。

先日、ご利用者の方が、お帰りの際に次のようなメッセージを受付カウンターに置いてくださいました。私達の心温まる「栄養剤」になりました。

「毎年、この時期にお世話になっております。〇〇県のお〇〇です。息子が心臓移植を決定し、弁の手術をし、それから10数年。移植が成功して元気になり、今は年に一度入院検査です。ずっとぶどうのいえを宿として使わせていただき、とても助かっております。ありがとうございます。これからも、どうぞよろしくお願いたします。」

「ぶどうのいえ」・ボランティアスタッフを大募集中です、詳細は電話03(3818)3362まで。

理事長 大隈廣

### 《信徒リレーエッセイ》

関わり・繋がり・広がり

東京聖三一教会

加藤望

笹森管理牧師とイム副牧師の司式説教の主日の聖餐式・教会暦に沿う礼拝・聖書研究会が、み言葉と霊性の学びとなり、食事を共にする誕生感謝餐会や懇親会が信徒同士と求道者と牧師の信頼と絆を育む働きとなる。

又、教会が地域社会のために存在するという視点での活動、例えば、地元の子供らが集うぶどうの木・クリスマス・イヴの池の上駅から教会までのキャロリング・多くの地域住民が協力してくださる秋のチャリティーバザー・代沢子ども文庫・奇数月第3水曜日のランチャイムコンサート・町内会主催で教会がホールを解放し協賛している代沢ガーデンカフェ等、一つ一つの働きは、関わり・繋がり・そして新たな広がりとなることへの祈りと希望である。

出会い・関わり・繋がり・広がり。創立130年を迎える東京聖三一教会に連なる人々の歴史そのものでもある。

パレスチナ難民、ガザに生きる人々 UNRWA保健局長、清田医師に訊く

2月3日開催の講演会で清田明宏医師自身で撮影した映像を中心に話をうかがいました。

基本情報

・パレスチナ難民…1948年イスラエル建国の際に、戦火を恐れてシリア、レバノン、ヨルダン、ヨルダン川西岸地区、ガザ地区に避難した人々。現在、子孫を含めて約550万人存在する。

・UNRWA、国連パレスチナ難民救済事業機関（通称ウナルワ）…1950年に設立され、3年の任期で完了すると考えたのが当時の国際社会の認識であった。その後3年毎の更新を繰り返して現在に至る。

・UNRWA本部がアンマン（ヨルダン）にある理由…エルサレム（イスラエル）に本部があると、シリアとレバノンはイスラエルと敵対関係にあるため、その職員は来れない。みんなが集まれるのがヨルダンである。

難民の人々の声

・ガザの経済封鎖、移動の制限によって起こっていること

1. ある家族の話…父親は家を守るためにギリギリまでがんばったが、結局、避難した。戻ってきたら家は壊されていた。学校も避難場所になっていたが、ぎゅうずめでプライバシーもないので家にもどってきただが、水も電気もない。母親に自分の娘に将来どんな人になって欲しいか聞くと、「あなたの国の子どもと同じように育って、家族を持って普通に生きてほしい」と。



普通、外部からの訪問者には本音は言わないのだが「でもこんな状態ならガザを出たい」と娘がパツと発言した。  
2. 家庭内暴力…男は家・家庭・家族を守るといふ社会的規範が強く残っているため、仕事がないとストレスがたまり、奥さんや子どもにつらく当たってしまう。UNRWA診療所の働きの1つ、DVグループカウンセリングの参加

者約30人の女性はほとんどがDV被害者である。保健サービスにできることは何かあるか尋ねると、全員が「だんなに職を！」  
・2014年1月、シリア内戦のあおりで取り残されたヤルムーク難民キャンプに2年ぶりに許可が下り、中に入ったらUNRWAが戻ってきた

と2万人の難民が押し寄せた。そのような中で何が起こっていたか。命の危機にある低たんぱく症の乳児の親から事情を聞くことができ

た。封鎖地域から出るのには非常に困難な状況下で、どうせ一度は死ぬんだとリスクを負って許可証なしで突破した。難民キャンプから反政府側検問所↓数百mの緩衝地帯（スナイパーが撃つ）↓ダマスカスに入る政府側の検問所までの道のりである。通訳する同僚に「大変ですね、なんか地獄みたいですね。」と言ったら同僚はそういうことは聞きた

くないから「訳したくない。」

「あほな日本人が聞いているから」と無理を言い、「地獄みたいですね」と言ったらその母親は「地獄の方がましよ。」

・現職に就いて9年、学んだこと…人々が健康になるには住んでいる社会が健康でなければならぬ。難民は社会的弱者であるから、彼らには社会のすべての問題が集約されている。普遍化はできないが、その社会で一番弱い人を見てみると、分かることがある。日本でも同様であろう。  
・思っていること…我々、日本人はたまたま難民ではなく、たまたま幸せな国に生まれた。難民になりたくてなる人はい

ない、たまたま難民になっ

てしまった。1週間か1ヶ月で家に戻れると思って、家の鍵を持って家を出たのが70年前。国際社会ができることの1つがUNRWA活動で、人道支援をする者は、あきらめずに最後まで仕事をやる。

参加者の感想…2014年の大侵攻以後続いていた物資不足も今では市場でいろいろなもの売られている。でも買うことができる人は限られているという。ガザでは成人男性の50%以上、20代では70%が失業中。難民キャンプの人たちがどのように生きながらえているか、心が痛んだ。

サラーム・パレスチナ

ちょっと聖書、ときどきユーモア（四十八）

1. 説教の変化

信徒A「最近、牧師さんの説教が少し変わってきたと思わない？」

信徒B「どんなふうに」

信徒A「なにか環境だの地球温暖化だのを語り、急に未来を心配しだしたよね」

信徒B「ああ、それはこの前、孫が生まれたからだよ」

2. 泳げないから・・・

牧師「イエスさまは、水の上を歩いたと聖書には書かれています」

子ども「それなら、私はイエスさまよりすごいわ」

牧師「どこがすごいんですか」

子ども「だって、私は泳げるもん」

3. 妻の祈り

妻「ねえ、お祈りは神さまとの対話でしょ、でもいくらお祈りしても、何も答えてくれないし、いつも私が一方的にお話しているように感じるの」

夫「よかった、おまえのおしゃべりにつきあってられないのは、俺だけじゃなかったんだ」